

## ジャーナリストとしてのジョージアナ・ボーカス —米国メソジスト監督派教会女性宣教師—

齋藤 元子

### はじめに

本稿で取り上げるジョージアナ・ボーカス(Georgiana Baucus)は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会ニューヨーク支部の派遣により、1890(明治 23)年 7 月に来日した女性宣教師である。明治期には、アメリカ、カナダなどから多数の女性宣教師が来日し、各地に女学校を設立して、日本の近代女子教育の基礎を築いたことはよく知られている。ボーカスも、函館、弘前、米沢の女学校で約 5 年間教鞭をとった。その後アメリカに帰国するが、日本の女性と子供に向けた文書による伝道活動を志し、自給宣教師として再来日する。

1897(明治 30)年、ボーカスは横浜の山手に常磐社という出版社を起こし、雑誌『常磐』や数多くの邦文書籍を発行した。ボーカスの志した出版活動は、いずれの教派においても、女性宣教師の活動として日本では類を見ないものであった。ボーカスの日本滞在は、1923(大正 12)年の関東大震災まで、30 年以上に及んだが、その大半は出版活動に費やされた。

ボーカスは、常磐社の出版物を通じて、キリスト教のみならず、料理、育児、文学、絵画、音楽、旅行など様々な角度から西欧文化を紹介した。その一方で、本国アメリカに向けて、日本の様子を頻繁に報告も行っていった。それらの報告は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会本部が発行する月刊

の機関誌 *Woman's Missionary Friend* に掲載され、広く会員に読まれた。女性宣教師の伝道地報告は、自らの活動の報告に加え、歴史や風俗習慣、名所旧跡などを紹介したものが圧倒的に多い。そのなかでボーカスの報告は、日本の時事問題に強く関心が向いており、異彩を放っている。常盤社の活動やアメリカへの報告から浮かび上がってくるボーカスの姿は、ジャーナリストと呼ぶにふさわしいものである。

筆者は前稿<sup>1</sup>において、常盤社の出版物を紹介し、雑誌『常磐』の日本女性雑誌ジャーナリズム史上への位置づけを試みた。本稿は、ボーカスのアメリカへ向けた活動に目を転じ、彼女の記した日本に関する報告から、ボーカスのジャーナリストとして視点や関心の対象を考察することを目的とする。これまでボーカスについては、女学校教師の頃の様子が学校史などを通して断片的に伝えられているにすぎない。本稿では、まず学校史などの記録から教師ボーカスの人物像を捉えた後に、ジャーナリストとしてのボーカスを論じることとする。

## 1. 女学校教師時代のボーカス

ボーカスは1890(明治23)年6月26日アメリカを発ち、7月13日に函館の遺愛女学校(遺愛学院の前身)に到着する<sup>2</sup>。同校において日本の生活に慣れた後、翌1891(明治24)年4月、弘前女学校(弘前学院の前身)へ校長として赴任する。弘前女学校は、1889(明治22)年遺愛女学校の分校として開校した。しかし、函館の女性宣教師は遺愛女学校の運営に多忙であり、弘前への出張はまれであった。それゆえに、弘前女学校は、数人の日本人教師に委ねられ、半ば無秩序な状況下にあった。ボーカスは米沢に着任したものの、前途の多

---

<sup>1</sup> 齋藤元子「米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による明治期の日本における文書活動 - 雑誌『常磐』を中心として -」、『ウェスレー・メソジスト研究』2 (2001)、37-54頁。

<sup>2</sup> *Heathen Woman's Friend*, 22-10, 1890, p.11. クランメル, J. W. 編『来日メソジスト宣教師事典 - 1873~1993年 -』教文館, 1998年, 15頁。 *Heathen Woman's Friend* は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の機関誌で、1896年に *Woman's Missionary Friend* と誌名変更される。

難に不安を覚えたのか、3ヶ月間滞在した後、二度と戻らぬ覚悟で函館に帰った。だが、同僚の助言を受け、利己主義的な行動を反省して、再度弘前に赴く決意を固める。弘前は外国人居留地外であったため、女性宣教師の常駐には特別な旅券の交付を必要とした。発行条件は厳格を極めたが、運良く常駐許可が下りる<sup>3</sup>。

弘前女学校の校長の職務のほか、ボーカスは大館や秋田方面にまで伝道に出かけたり、自宅に街の子供を集めて日曜学校を開いたり、子守の少女が赤ん坊を連れのまま学べる子守学校を設立するなど、積極的に活動した<sup>4</sup>。ボーカスは気丈な性格の持ち主であったらしく、弘前教会や近隣の日本人とかなり激しく衝突したと伝えられている<sup>5</sup>。だが、その背景には、居留地外での学校運営という困難な任務から生じる様々な苦悩があったことは想像に難くない。ボーカスは自分が校長を名乗ったがゆえに、書類を役所から却下されたことに無力感を覚えつつも、日本国家に対して忠誠であることを示すために、祝祭日の行事を遵守した。また、紀元節と日曜日が重なった際には、土曜日に儀式の一部を済ませ、日曜日に教会へ行く時間を捻出する努力も怠らなかった<sup>6</sup>。ボーカスの約4年間の活動の結果、赴任時には40名に減少していた弘前女学校の生徒数は、5年後には約70名となった<sup>7</sup>。

ボーカスは、文部省の規則に従って聖書から全く離れた修身の科目を教授することに不満を覚え、聖書の引用からなる *A Cluster of Ethical Precepts* (道徳上の教訓集)と題した修身教科書を自ら作成した。ボーカスは人間のありべき姿を一本の松ノ木に喩え、根は神への愛、幹は人類愛を表わし、その幹は孝行・夫婦愛・愛国心・高潔・友情・勤勉・希望などの枝へと伸びていることを示した。そして、これら人間としての義務にまつわる話を聖書から引いて解説している。編集のスタイルは、神話や格言を多数盛り込んだ日本

<sup>3</sup> 本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』丸善仙台支店、1994年、80・81・88・89頁。

<sup>4</sup> 弘前学院百年史編集委員会編『弘前学院百年史』弘前学院、1990年、61-64頁。前掲注3、89頁。

<sup>5</sup> 前掲注4、61-63頁。

<sup>6</sup> 前掲注3、90頁。前掲注4、63頁。

<sup>7</sup> 前掲注3、88・98頁。

の修身教科書の型を踏襲したものである。この教科書は、1895(明治 28)年『聖書修身談叢』のタイトルで、メソジスト出版舎より刊行された。教科書作成の作業は、出版という新たな活動へ自己を導く契機になったとボーカスは後に語っている<sup>8</sup>。

ボーカスは、1894(明治 27)年 4 月、健康を害して一時帰国した女性宣教師の不足を補うために、米沢英和女学校(1895 年廃校)へ赴いた<sup>9</sup>。女学生は「これまでの女性宣教師より少し年長の穏やかで温かい人」「考え深そうな青い目が美しい人」という印象をボーカスに抱いている。ボーカスが米沢に滞在していた 1894(明治 27)年 5 月 26 日、山形市に大火が発生した。ボーカスは罹災者のために 10 円を寄付したと米沢の新聞は報じている<sup>10</sup>。当時の 10 円という金額は、女学校日本人教師の一ヶ月の給与に相当した。米沢での支援を終えた後、ボーカスは弘前に戻り、1895(明治 28)年春、函館の遺愛女学校を経てアメリカへ一時帰国する<sup>11</sup>。

ボーカスの教師時代、日本は鹿鳴館に象徴された欧化主義政策の時代が去り、国家主義の台頭が顕著であった。そのような逆境のなか、ボーカスは外国人居留地外に位置する女学校の校長として、孤軍奮闘を強いられたのである。1891(明治 24)年に校長として弘前に赴任はしたが、1894(明治 27)年の条約改正による居留地の撤廃まで、日本の役所はボーカスを校長として承認していなかった<sup>12</sup>。居留地外の生活は、ボーカスに多くの困難を負わせた。だが、その一方で、日本の社会に触れる機会をボーカスに与え、後にジャーナリストとして日本の世相を鋭く観察する目を養わせたという見方もできる。また、聖書の引用を盛り込んだ独自の修身教科書を編纂したというエピソードは、ボーカスの編集者として潜在的な能力を物語っているとともに、女学

---

<sup>8</sup> *Woman's Missionary Friend*, 28-7, 1897, p.199. ボーカス, G. 「基督教学」, 鶴飼猛編『宣教開始五十年記念講演集』宣教開始五十年記念会事務所, 1909 年, 263-264 頁。

<sup>9</sup> 前掲注 3, 244 頁。

<sup>10</sup> 遠藤寛子『米沢英和女学校』岩崎書店, 1981 年, 122・139-140 頁。

<sup>11</sup> 前掲注 4, 62・65 頁。

<sup>12</sup> 前掲注 3, 97 頁。

校の運営に特化した女性宣教師の活動に対する限界を感じ始め<sup>13</sup>、新たな活動の可能性を模索していたボーカスの姿を想起させる。

## 2. *In Journeyings Oft : A Sketch of the Life and Travels of Mary C. Nind*

1895(明治 28)年日本を離れたボーカスは、世界を周遊して、アメリカへ戻った。そして、1897(明治 30)年夏に文書伝道を志して再度日本へ発つまでの間、一冊の著書を執筆している。それは *In Journeyings Oft : A Sketch of the Life and Travels of Mary C. Nind* (以下 *In Journeyings Oft* と記す)と題したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の元役員メアリー・ニンド (Mary Nind) の世界旅行記である。地図と写真を盛り込んだ 334 頁から成る長編で、1897 年シンシナティの *Curts & Jennins* より出版された。

ニンドは、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の役員を引退後、1894 年 5 月から 1896 年 9 月まで 2 年以上をかけて、同協会が派遣した女性宣教師の活動するアジアの伝道地を訪問した。日本には 1894(明治 27)年の 6 月から 10 月まで滞在し、同協会が設立した女学校のある横浜、東京、名古屋、函館、弘前、長崎を訪問し、その途上で浅草や日光などの観光地も訪れている。弘前では、米沢の支援から戻っていたボーカスの住む日本家屋に滞在し、日本の生活を体験した。ニンドはその後、中国、シンガポール、ビルマ、インドを訪問し、ヨーロッパ経由で帰国する。ボーカスも、1895(明治 28)年 7 月 11 日から 20 日まで開催されたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会第 12 回日本年会に出席した後、世界を周遊してアメリカに一時帰国するが、その旅の一部はニンドの旅に合流するものであった。ボーカスはニンドとともに中国、シンガポール、インド、ローマなどに滞在している。そして、ニンドがアメリカに帰国した 1896 年 9 月 2 日からボーカス自身が再度日本へ出発する 1897 年 8 月 24 日までの 1 年弱の間に、*In Journeyings Oft* を書き上

<sup>13</sup> 弘前女学校は居留地外のキリスト教学校であったため、政府当局の厳重な監視下に置かれていた。祝祭日には、儀式をきちんと守っているか必ず役人が確認に来た。1893(明治 26)年には、聖書教育を正式な教科として認めないとする通告を受ける。前掲注 4, 63 頁。

げたことになる<sup>14</sup>。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会機関誌 *Woman's Missionary Friend* の 1897 年 11 月号には、*In Journeyings Oft* の紹介がみられるが、ボーカスは本書によって“文筆家宣教師(literary missionary)”という肩書きを獲得したと書かれている<sup>15</sup>。*In Journeyings Oft* は、ボーカスのジャーナリストとしてのデビュー作品といえるものである。

*In Journeyings Oft* は、今日ほとんど埋もれた状態にある<sup>16</sup>が、19 世紀後半にアジアを旅したアメリカ人女性の記録として、地理学や女性史の興味深い研究対象になりうる。女性史の観点から 19 世紀の欧米社会をみると、その特徴として、女性の行動空間の拡大を挙げることができる。海外旅行は顕著な例であり、アジア、アフリカの奥地を単独で旅する女性旅行家も出現した。これら女性旅行家の多くは、けっして若くはない中年層の女性であった<sup>17</sup>。1878(明治 11)年に日本の奥地を旅し *Unbeaten Tracks in Japan*(1880)を著した英国人女性旅行家イザベラ・バード(Isabella Bird)は、日本を訪れた時、47 歳であった。その後バードは、50 歳代末にチベットとペルシャを旅し、63 歳から 65 歳にかけて再度日本を訪れた後、朝鮮、中国を巡っている。さらに 70 歳で 6 ヶ月間モロッコに滞在し、1904 年 72 歳で没している<sup>18</sup>。ニンドがアジアへの旅に出発したのは、68 歳の時であった。ニンドの旅は、親類の同伴者がおり、バードが馬で秘境を旅したような冒険に富んだものではなかった。しかし、老人と呼びうる年齢に達した女性

---

<sup>14</sup> John Newton Nind, *Mary Clarke Nind and Her Work: Her Childhood, Girlhood, Married life, Religious Experience and Activity*, J. N. Nind, 1906. *Heathen Woman's friend*, 27-4, 1895, pp.101-102. *Woman's Missionary Friend*, 27-7, 1896, p.189; 27-8, 1896, p.219; 27-9, 1896, p.279; 29-3, 1897, p.71.

<sup>15</sup> *Woman's Missionary Friend*, 29-5, 1897, p.144.

<sup>16</sup> ボーカスが関係した女学校を前身とする学校史のなかで、本書に言及したものは見当たらない。唯一、クランメル, J. W. 編『来日メソジスト宣教師事典 ー1873～1993年ー』のボーカスの項目中に本書の紹介がある。前掲注 2, 15 頁。

<sup>17</sup> Mona Domosh, “Toward a Feminist Historiography of Geography”, *Transactions of the Institute of British Geographers* 16 (1991), p.97. ドモシュ, M. 著, 齋藤元子訳「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述をめざして」, 『空間・社会・地理思想』6, 2001 年, 153 頁。

<sup>18</sup> バード, I. 著, 高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社, 1973 年, 382-383 頁。

が、長期間アジアを旅することは一つの冒険であったといえる。そして、ニンドのような老齢の女性が海外を旅した事実は、女性の行動空間の拡大が幅広い年齢層に及んでいたことを証明している。

また *In Journeyings Off* には多数の写真が掲載されているが、写真術の普及という観点からも興味深い史料である。上述した英国人女性旅行家バードは、19世紀半ばから末にかけて世界各地を旅し、多くの旅行記を残したが、バードが初めて旅先で写真撮影を行ったのは1890年であり、旅行記に掲載された写真の数が銅版画を上回るのは、1898年以降である<sup>19</sup>。ニンドの旅は、バードが旅行記に写真を活用しはじめた頃とほぼ同じ時期である。*In Journeyings Off* に掲載された写真は、ニンドが撮影したものか、あるいは同伴者によるものなのか明らかではない。だが、いずれにしても、19世紀末には欧米社会に写真が広く普及し、旅行記の出版を生業としていたバードのような人物のみならず、一般の欧米人も写真機を携えて海外旅行に出かけていたことを示す史料として、注目に値する。

さらに *In Journeyings Off* の日本滞在記の部分は、14世紀のマルコ・ポーロや16世紀のイエズス会宣教師、明治初期のお雇い外国人などによる日本見聞記の系譜に連なる日本紹介書として、地理学や東西交渉史の関心を引くものである。かつて京都大学人文科学研究所では、19世紀から20世紀初頭に外国人によって書かれた未訳の日本見聞記を発掘紹介するという研究班を組み、4年半の間に58の見聞記を紹介した<sup>20</sup>。そのなかの一つに、ニンドと

<sup>19</sup> 金坂清則『イザベラ・バード論のための関係資料と基礎的検討』研究報告3, 旅の文化研究所, 1995年, 8・54頁。

<sup>20</sup> 「19世紀日本の情報と社会変動」研究班「談叢近代日本関係書I～VI」, 『人文科学報』48, 1980年, 113-147頁; 49, 1981年, 193-236頁; 50, 1981年, 263-279頁; 51, 1982年, 101-138頁; 54, 1983年, 93-113頁; 57, 1984年, 59-130頁。58の見聞記のうち、13が女性によって書かれた。このなかの数編は現在翻訳書が刊行されている。例えば、フレイザー, M. 著, 横山俊夫訳『英国公使夫人の見た明治日本』淡交社, 1988年; グヌタン, E. M. 著, 長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』中央公論社, 1992年; ベーコン, A. 著, 久野明子訳『華族女学校教師が見た明治日本の内側』中央公論社, 1994年; シドモア, E. R. 著, 外崎克久訳『シドモア日本紀行 一明治の人力車ツアー』講談社, 2002年。

同様、伝道地訪問の旅として 1891(明治 24)年に日本を訪れた英国人女性ビッカーステス (M. Bickersteth) の旅行記がある。著者の兄は日本で活動する英国国教会の宣教師であった。紹介者の園田英弘は、この旅行記の特色として、訪問先に大都市や観光地ではない場所が含まれていることを挙げ、そこは英国国教会の伝道地であったと解説している<sup>21</sup>。欧米人による明治期の日本見聞記には、東京、横浜、函館、長崎、日光などに関する記録が多いなか、ビッカーステスの旅行記は、英国国教会の伝道地である九州の一農村についての記述がみられる。この例が示すように、伝道地訪問記は言及されている場所に特異性があり、見聞記の系譜においても異色なものである。また、明治期の一地方の様子を伝える記録としても価値がある。ニンドの日本訪問の目的は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が設立した女学校を視察することにあつた。よって、女学校の所在地である東京、横浜、名古屋、函館、弘前、長崎が主要な滞在先であつた。*In Journeyings Oft*の日本滞在記は、これらの都市と移動の道中での体験が綴られている。なかでも弘前について記した部分は、ニンドの体験に加えて、居住者である著者ボーカスの弘前に関する豊富な知識や経験が記され、旅行記というよりも、生活者の記録と呼ぶにふさわしい内容となっている。弘前は、メソジスト監督派教会の伝道地であつたが、欧米人が多く訪れる都市ではなく、見聞記にもあまり登場しない。*In Journeyings Oft*の弘前滞在記<sup>22</sup>は、上述した伝道地訪問記の特徴を有しているのみならず、短期滞在では知り得ない情報が盛られている点において、史料としての価値はかなり高いといえる。

ニンドは 1894(明治 27)年夏に函館から青森経由で弘前を訪れている。青森から弘前までは、人力車で約 7 時間の旅であつた<sup>23</sup>。青森・弘前は間もなく鉄道が開通し、1 時間で結ばれようとしていた<sup>24</sup>。ボーカスはこれまで幾度となく馬車や櫓で青森へ通つたことを回想し、「道の曲がり具合や高低

---

<sup>21</sup> 園田英弘「M. Bickersteth. *Japan As We Saw It*. London: Sampson Low, Marston, and Company, 1893」, 『人文学報』48, 1980年, 136-140頁。

<sup>22</sup> 弘前滞在記は、*In Journeyings Oft* の 92-116 頁。

<sup>23</sup> J. Nind, 前掲注 14, pp.63-64.

<sup>24</sup> 青森・弘前間の鉄道は、1897(明治 27)年末に開通した。小岩信竹・高橋堅太郎・四宮俊之・工藤堯『青森県の百年 一県民 100 年史-』山川出版社, 1987年, 89頁。



差、石ころやぬかるみの感触まではっきりと体が覚えている。」と述べている。弘前のシンボルは城であり、その姿はニンドを魅了した。だが、「弘前の人々、特に年配者にとって、城は今や過去の栄光でしかなく、その荒れ行く姿を目にしたくないがため、城にはあまり近づかない。また、城について何か尋ねても、口数少なく、“たいそう広い”と寂しげに答えるのみである。」と、ポーカスは老人の言葉をローマ字で示し、その心情を説明している。また、「和徳橋から寺町、塩分町へと進む沿道は、黒ずんだ平屋建ての家並みが続き、寺町には旅館と写真館の間に教会があった。塩分町の借家の住まいは周囲で唯一の二階建てで、“二階の家”として知られていた。」と、二階家とその沿道の写真を掲載している。ポーカスが具体的な地名を書き残したことにより、掲載された写真は、場所が特定され、明治中期の弘前の町並みを示す一史料として評価できるものとなっている。またポーカスは、住まいの二階の窓から眺められる津軽富士こと岩木山にしばしば勇氣と安らぎを与えられたと記している。そして「この感情は客人のニンドには沸いてこないものであろう。だが、これは弘前に生まれ育った人たちが抱いている神聖さにはとても及ばないものである。岩木山の奥に宿ると信じる目に見えない神に対して、人々は断食、供物、祈りを捧げるのである。」と述べ、住民の岩木山信仰に情動的な理解を示している。岩木山は古くから山岳信仰の対象とされていた。夏には五穀豊穰を祈願して、人々が集団で登山を行うお山参詣が催される<sup>25</sup>。ニンドの弘前滞在中にも、旗や提灯を携えた人々が連日列をなして、ポーカスの住まいの前を通過していった。ニンドはこの光景に強い印象を受け、死後息子によって出版された彼女の伝記のなかにも、その思い出が書かれている<sup>26</sup>。ニンドは人々の風貌や持ち物を詳しく記憶していたが、行列の目的地については何も語っていない。だが、ポーカスの岩木山信仰に関する記述を参照することにより、ニンドの目を引いた行列がどこを目指していたのか、どのような風習であったのかを知ることができる。つまり、ポーカスの記述は、ニンドの伝記に日本見聞記としての価値を持たせることを可能にするのである。

<sup>25</sup> 「角川日本地名大辞典」編集委員会編『角川地名大辞典2 青森県』角川書店、1985年、145頁。

<sup>26</sup> J. Nind, 前掲注14, p.63.

*In Journeyings Oft*の弘前滞在記は、上述したようなボーカスの生活者としての視点が加味された特異な旅行記となっている。ボーカスは再来日後、日本人の心情や生活ぶりを鋭く観察した多数の報告をアメリカに書き送っているが、ジャーナリストとしてのデビュー作である*In Journeyings Oft*の弘前滞在記には、その萌芽が認められる。

### 3. ボーカスの日本報告

1897(明治30)年9月、自給宣教師として再来日したボーカスは、横浜山手に常磐社という出版社を設立し、日本の女性と子供に向けた雑誌や書籍などを発行する活動に従事する。その一方で、アメリカのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会本部にあてて、日本の様子を取材し、報告していた。協会の機関誌 *Woman's Missionary Friend* に掲載されたボーカスの明治末年までの報告を挙げてみる。「日本の嫁と姑」(1900年, Vol.32-2, pp.50-51)、「皇族の結婚式」(1900年, Vol.32-4, p.139)、「日本は異教国か?」(1900年, Vol.32-5, pp.163-164)、「第五回日本博覧会」(1903年, Vol.35-10, pp.343-349)、「戦時下の日本」(1905年, Vol.37-1, pp.2-6)、「横浜における兵士への奉仕」(1905年, Vol.37-4, pp.115-119)、「日本の陸軍病院」(1906年, Vol.38-1, pp.2-4)、「日露戦争」(1906年, Vol.38-1, p.20)、「横浜五十年祭」(1909年, Vol.41-11, pp.383-385)、「日本が喪に服した日」(1912年, Vol.44-10, pp.382-384)。

ボーカスの報告は、そのタイトルを読んだだけでも、時事問題や世相を扱ったものが多いことがわかる。日露戦争、明治天皇死去といった歴史的出来事や1903(明治36)年に大阪の天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会<sup>27</sup>、1909(明治42)年の横浜開港五十周年の祝典といった催しなどがレポートさ

---

<sup>27</sup> 内国勸業博覧会は、文明開化と殖産興業のための催しとして1877(明治10)年に始まった。第五回博覧会は、開催期間5ヶ月、出品者数12万人、入場者数435万人という過去に例のない規模であった。また、初めてメリーゴーラウンド、ウォーターシュート、エレベーター付き展望台など遊戯娯楽施設が導入され、大衆の興味を引き付けた。吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社、1992年、127・146-147頁。

れている。ボーカスは日本人、特に庶民の生活や心情に関心の目を向け、戦争中の暮らしぶりや催しに集う人々の姿を、写真を織り交ぜながら、臨場感豊かに記述している。

明治期の後半には、常時 30 人以上のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会派遣の女性宣教師が日本に在住していた<sup>28</sup>。だが、機関誌 *Woman's Missionary Friend* に掲載されたボーカス以外の日本報告はあまり多くない。日露戦争に関しては、ボーカスの出版活動の協力者として来日したディキンソン(Emma Dickinson)による「日本人の心」(1905 年, Vol.37-2, pp.39-40)と「出血する傷口と痛む心」(1906 年, Vol.38-1, pp.4-7)、弘前在住グリフィス(M. Belle Griffiths)による「兵士と小冊子」(1905 年, Vol.37-8, pp.265-267)と「千人針」(1905 年, Vol.37-8, pp.271-272)がみられるに過ぎない。また、明治天皇の死去に関しては、東京在住ワイス(Grace Wythe)による「崩御」(1913 年, Vol.45-1, pp.7-9)のみである。女性宣教師からの報告がすべて機関誌に掲載されたとは考えられないので、上記以外の報告もあった可能性は高い。だが、明治後期の歴史的な出来事に関して、ボーカスの報告が複数掲載されている事実は、仮に同じトピックの報告が複数寄せられていたとしても、そのなかからボーカスの報告を採用したことを意味している。つまり、ボーカスの報告が最も読み応えがあり、読者の関心を引く内容であるとみなされたということである。ボーカスの報告には、自らが現場に赴いて目撃し、感じたことを報道しようとするジャーナリストの姿勢がうかがえる。ボーカスは、常磐社を拠点として、日本に向けたジャーナリスト活動を展開すると同時に、機関誌 *Woman's Missionary Friend* の日本特派員のような使命感をもって、アメリカに向け日本のニュースを積極的に報告していたとみることができる。

ボーカスの日本報告のなかでも、ジャーナリストとしての姿勢が最も表れているのが、日露戦争に関する報告である。ボーカスは、戦時下の日本の様

---

<sup>28</sup> Mary Isham, *Valorous Ventures – A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church* -, Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church Publication Office, 1936, p.442 の名簿より算出。

子を伝えようと、多角的な視点から複数の報告を行っている。次章では、ポーカスの日露戦争に関する報告を取り上げ、どのようなことをアメリカに伝えたかを考察したい。

#### 4. ポーカスのみた日露戦争

ポーカスの日露戦争に関する報告は、「戦時下の日本」(1905年, Vol.37-1, pp.2-6)、「横浜における兵士への奉仕」(1905年, Vol.37-4, pp.115-119)、「日本の陸軍病院」(1906年, Vol.38-1, pp.2-4)、「日露戦争」(1906年, Vol.38-1, p.20)である。ポーカスは、日本人の日々の生活に表れた戦争の影響を様々な角度から報じているが、特にその視線は女性と子供に注がれている。「開戦以来、子供の路上遊びに変化が起こった。子供らはおもちゃの鉄砲や旗を持って行進し、時には撃ち合いを演じて、担架で死傷者を運ぶ真似までする」、「日本軍の快進撃が報じられ、各地で花火が打ち上げられて、勝利のムードが高まっていくなか、葬儀の列は日を追うごとに増している。その多くに亡き骸はなく、わずかな遺髪だけが残された妻や母のもとに届けられている」と、ポーカスは戦時下の光景を伝える一方で、銃後の守りとしての女性の活躍を、積極的に紹介している。

横浜在住のポーカスは、出征兵士の見送りや慰問袋の製作などに奉仕する横浜の女性たちを訪問し、自らもその奉仕に加わりながら、彼女たちの活動取材した。横浜の女性たちは、日露戦争開始直後の1904(明治37)年2月横浜奨兵義会婦人部を結成し、出征兵士の見送りと家族の慰問を中心に、慰問品としての鯉節・でんぶの寄贈、募金の徴収、戦死者の会葬などを行っていた。委員長は、1901(明治34)年に傷病兵・遺族の支援を目的に組織された愛国婦人会の県支部幹事であった渡辺たまが就任し、横浜市内を5区に分け、各区40名の委員の下、約1万5千人の女性が活動した。第4区の委員であった二宮わかばは、メソジスト監督派教会(美以教会)の教会員であり、1881(明治14)年貧しい未就学児童のために警醒小学校を設立するなど社会福祉に力

を尽くしていた<sup>29</sup>。

ボーカスは、東海道線の神奈川駅に赴き、二宮わかとともに、聖句を記した熨斗つきの菓子袋を兵士に手渡した。「奉仕の女性たちは、何時に列車が到着し、何人の兵士が乗車しているか正確に把握しており、慰問品に過不足が生じることは決してない」と、準備の周到さをボーカスは驚嘆をもって記している。兵士を見送った後、ボーカスは二宮わかに誘われ、委員長の渡辺たま宅で行われている慰問品のでんぶ作りを見学する。「3年から4年天日干しをして石のように硬くなった魚を削り、しょうゆで味付けし、水分がなくなるまで乾燥させる」という作業が、広い庭でなされていた。そして、屋内の一室では、「でんぶを入れる袋が作られていた。手で縫う者とミシンを使う者がおり、袋は湿気を通さないように、厚紙の裏付けがされていた。女性たちはすでに4万袋を作成し、前線に送っていた。でんぶは非常に喜ばれる慰問品で、一つまみを水に溶かして食するだけで、兵士の空腹を満たす助けとなり、アメリカ人にとっての牛肉エキスに相当するものである。」とボーカスは紹介している。そして、「奉仕をしている女性たちは、皆一様に生き生きと輝いており、ボランティアとして働く喜びが表情に溢れている。彼女たちは同情心が厚くかつ自主性があり、その活動はよく組織化されている。」と評価のコメントを記している。

ボーカスが戦時下の女性による奉仕活動を詳細に報告し、賞賛した背景には、その活動をアメリカ女性の経験と重ね合わせる気持ちが働いたからであろう。約40年前の南北戦争の時、アメリカの女性たちは、兵士の慰問、兵士家族の援助、医療活動の支援など、日本の女性と同様の奉仕活動を行った。そして、それらの活動を通じて、組織作りを体験し、資金調達・事務処理・広報といった組織の運営に必要な手腕を身につけたのである。この経験が基礎となり、その後アメリカの女性たちは様々な社会活動を組織的に展開するようになる。異教地に女性宣教師を派遣する目的で、プロテスタント教会のなかに形成された女性海外伝道協会もその一つである<sup>30</sup>。戦争は国を問わず、

<sup>29</sup> 神奈川県立婦人総合センター・かながわ女性史編集委員会編著『夜明けの航跡 — かながわ近代の女たち—』ドメス出版、1987年、30・36・46・164—166頁。

<sup>30</sup> 齋藤元子「19世紀アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動」、『お茶の水

女性に悲しみと重荷を背負わせるものではあるが、女性の献身的な愛情を社会的に役立てる訓練の場にもなるということ、ボーカスはアメリカの女性に伝えようとしたと思われる。

南北戦争の経験から、戦時下の奉仕活動は女性の社会化を促すという確信をアメリカ女性は抱いていた。日清戦争中、津田梅子がアメリカの雑誌 *The Independent* に、日本女性の献身的な自己犠牲の精神を讃える一文を発表した際、南北戦争が女性運動の生まれる契機となったように、日本でも戦争の後に、女性運動が起こることを期待しているという激励の言葉をアメリカから受けている<sup>31</sup>。ボーカスの日露戦争に関する報告は、まさにこの期待が実現されたことを伝えるものであったといえる。だが、ここで語られている女性運動とは、女性の権利を主張する運動、例えば参政権獲得運動のようなラディカルな運動を意味するのではない。南北戦争後に開花した女性運動とは、女性が妻あるいは母として家族に愛情を注ぐことの延長上にある活動であり、家庭性と結びついた運動であった。アメリカの女性海外伝道運動を支えたのは、女性の家庭性を信奉する、いわば保守的な中流階級の白人女性であった。彼女たちの多くは、参政権獲得運動とは一線を画しており、恐れずら感じていた人もいた<sup>32</sup>。ボーカスが日露戦争における日本女性の活躍を詳細に報じたのも、それらが家庭性と結びついたものだったからである。ボーカスの報告には、日露戦争への反戦の思いを「君死にたまふことなかれ」と高らかに歌い上げた与謝野晶子のような女性は、まったく登場してこない。このように、ボーカスのジャーナリストとしての姿勢は、ラディカルなものではなかったことを指摘しておきたい。

## おわりに

明治期にはアメリカから多数の女性宣教師が来日したが、日本で出版活動

---

地理』40, 1999年, 33-38頁。

<sup>31</sup> 山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館, 1962年, 147頁。

<sup>32</sup> Patricia R. Hill, “Heathen Women’s Friend : The Role of Methodist Episcopal Women in the Women’s Foreign Mission Movement, 1869-1915”, *Methodist History* 19-3 (1981), p.151.

に従事し、ジャーナリストとして日米間の文化や情報の交流に力を注いだ女性宣教師は、ボーカスを置いて他にいなかったと思われる。1994年、キリスト教史学会第44回大会において「女性宣教師と教育」と題するシンポジウムが開催され、明治期の女子教育に果たした女性宣教師の役割について研究発表がなされた。その席上、女性宣教師の研究者に対して、教派間の違いを問うコメントが発せられた<sup>33</sup>。だが、この問いに答えるような研究は、10年近くを経た今日に至っても、特筆すべきものは見当たらない。このことは、女学校の設立・運営という女性宣教師の中心的な活動においては、教派間の著しい差異というものは存在しなかったという証左かもしれない。しかし、女学校教師から身を転じ、ジャーナリストとして活動したボーカスの存在は、彼女を擁したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会に際立った特徴を与えたということができる。

19世紀アメリカの女性は、海外情報の多くを女性宣教師の報告から得ていたといわれている。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の会員数は、教派間で最大であった<sup>34</sup>。よって、ボーカスの*In Journeyings Off*や機関誌*Woman's Missionary Friend*掲載の報告は、多数の女性に読まれ、日本についての新鮮な知識を提供したに違いない。また、今日それらは、アメリカ人女性が書いた明治期の記録として、女性学、地理学、歴史学などの関心を引くものでもある。

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

---

<sup>33</sup> シンポジウム『女性宣教師と教育』、『キリスト教史学』48, 1994年, 62-87頁。

<sup>34</sup> 齋藤元子「明治初期におけるアメリカ人女性宣教師の日本報告」、『歴史地理学』44-3, 2002年, 22頁。